李撰文選

亨

541
1182
2

李撰文選卷之二目録

一　移居　六味
二　廉風賦　桃溪
三　嘆ノ箴　文橘
四　送六味義之芳野序　桃溪
五　送川越掃部　文橘
六　送桃溪子序　六味
七　与文橘子文　〃
八　赤水二虫ノ論　文橘
九　鬼ノ無　桃溪

十　求二不ッ辞　六味
十一　陳申ノ解　桃溪
十二　不成能日ノ論　支櫻

李撰文選巻之二

一　移居辞　六味

今ハ昔柳橋菓といへる乳山の麓竹門といへる茶
きりとの水をよすがとして草庵を結び暫く
人間の足跡絶たるを悦びうるおとをきんとをーるみち
ある紀伊国の名所也さるをもて果さぬ病日くよ
せまり終に八世の業もかいやり捨て茶餅のこと釈
しむさすれハ宮たの式柳の糸ゝるゝを知ず冥中の
恐おのつゝふ望なるもそれも安がてよ孫生もいつし
うよくを生なるゝら紋さりて財産するひ玄蹟例所

とひ弱くして用を仕するハさるゆゑ〳〵法を避け陽ふ
うつるハなをと表之のりてゆれとしせちまするゆゑ
誠や孟子の所ハ氣を移すとゆのぬへハ逆ゆ移屈
せんよハ〳〵ふ決して仲の為まつるハ邸ゆ身をとる
るにをとゝまりてゆいひ孫といひ親〳〵おむりて
起弼とゆくさあ伯をハ又ゆきをの志をにして病も
志〳〵とりよゆん爰伯りぬされハ柳楊の柳ハ和春て
辺ゆ新〳〵丈楊と此楊一りとを楊〳〵うへぬハ梅や
こゝせにとせゆつりきまてゆ咲出てゆ〳〵志れす
〳〵ゆ新せ〳〵と又ゆるまをを考〳〵ぬ多と終りて
こてのゆ爰をゆ楊楊のゆさ本を楊せ今〳〵り楊楊

樓とゆそんもむへゆりゆ〳〵し結結ゆと歳悦するゆ
爰ゆ衡仕と〳〵て烏有とゆるそのかを賣葉義と
ゆて東漂西泊つゆゆ一カ水をゆさしたる所ハまを爰の
志ゆつのりある日ハ花氏ゆ貨殖をゆんとせしも何
〳〵ゆ閑無の憂ひを忘をゆ〳〵糟糠の中に
日月をとゝり丈ゆと所〳〵條虎ゆ逃さるを怪ひ
とゆ志〳〵てをゆを分すこやゆ〳〵ハ彼炊性法網
の術も恬淡虛妄の者ゆもいさ〳〵ゆ爰を求る
一癡淫ゆ元〳〵く出世るゆををつれ迫分ゆを
あ〳〵て動靜ゆ〳〵ゆ失ひて郭郭ゆ匍匐すと
ゆ〳〵〳〵てゆ區〳〵とゆて筆次の日に備耕し

うつ〳〵二毛とあられむさるとゝる稲半穂の後りと
和て百里よ来と夏ふ雨乱とおりへと二十鶴うゐひ
きん玉月庭山のゆしとうそ生ハ仲夏の湿熱よ病る
ゆ〳〵ん家ハよ世多来江湖を捩てす山すもゆり涼ゆを
変すれハきてろ京壊と悩すしもゆ〳〵ぬと我ゑし
痛よせすりてきうづねゆて礼とこゞる去病者
ようつりく懐情さひゆ一樽〳〵として新あそも
いゝへハまして杖門高家よ使するゆおりひ絵うり
かくてきおのつり〳〵多病喪んの徒となりぬへ三伝
者よ児孫れゆ一ゆひとを切て世外云用の一宗へゝん
つゑ柳の枝乃雪よりさまた弱よく強と割せる老子

の道ゆもかゆひ待〳〵んこ至てて絵る所以を知すして
絵るりの八恵者ら一大枝茅ゆ〳〵ハやとひとゆ〳〵を絵
し絵りぬ

二　扇風紙

桃溪

昔紙ゆよ風とちりそけこ者とせんとて製〳〵ら
扇ハ〳〵へるりの世の文彩よつ至て弗くの操作を巧
めゆをめてら紀伝代ハ海ゆん殿閣よハ多絵の八枝打を
也し白屋よきる墨絵の古枝打をしく出るハ〳〵まる
ゆの呼の二枝折を立て神楯の打を彩る人骨よハ幕扇
を者〳〵せ孔炉先よきゆ生ハ扇扇れを飾るこる紀ようう

て又押附（ナゲシ）といひ候さまにありてハ枕屏風と称す
郷中にてハ呉越東西の家に隣り　柳巷にてハ
乾坤日夜の境を隔つ　隠逸遊居の名録ありて
色紙短冊に詩歌を押しる子が庵かきれ茶店
にも江戸大津の浮世絵を張るさしてぞ古書の比叡
に屏風坂あきハ須弥の行場に屏風岩あて君子
の庖厨を遠ざくるも読に見ぬら極楽しいへもされ
ば屏風の中なすがりん黒伝の百二十餘も書え十二
月も名ある設けらり新文婚姻にハ白絵の屏
隠しを囲ひ新枕にハ新身の色絵を好む況や人めの
笑りる思ひ宗咳なか紙屏風の凡さるふもなり

ぬへし其名しさまに及んでハ蛾眉の容を並へて閨屏
の暖気を求るとやされハ世のことわざに屏風と商人ハ
まがらねハ立ずといへるおかし戯きやうの子房が
屏風の画として係るも花瓶から屏風のまがりて
功を全うせる足跡いつまでもあらんなかしや
金銭の為なから孫とも江戸の名る波を隔つるも否
屏風にかゝき世渡りを志らハ宋儒の口癖に似さ
れど彼の人欲をふせく心の屏風を秘蔵すへし

三　嗅ノ識　　亥橋

視聴言動の四つハ古人もいましめ置しと湖东乃

菓は仏ちこれよりおのはをつけて月ゐるより出ん月りと
いへかたをとの菓はこれを生と称右より絵して居をしとハ
のみひろり九に殷九穀名月る所ちく東をなす次
多其陽よりてのりり是乃法すして下るハつも是
月のつん耳は生もおのを生くり一義也さをかくいまむ
屋きよハあ〜ねく丈出ずる所よりなのやまちハ出来
ぬへ〜爰をんの約よ絵也るすをとハいへるのん
いてそよ耳月は皇ハ友位もおの〜堂上の殿くのを
おで皇をりハ古人もゆるやふせるとを爰より出蓮城
なして礼よりなくれハ喚すのられとのりりし
世よをにそむをとのをいまして香よめつるハをくを

いをすハ生をを香よりうはりてをを出へハ名を
よくをの山ハをとをいをん
雲の歌は樹月ハいををををかりのあや紀よ香
やハかく海と海せくも出歌よ張りて八耳よりも月
よりをぬき出さるよ抽成へ〜又出橋のをりを
昔の人は神の名をそを改宣しるも出はよのハ
いうでの名叔紋の芳なくハをまいて紫菊のををくしれ
名仙山菓花のはてやうるるををんすもんを爰よ
梅りぬへ〜はるをくをそ彼は師もさのを月すて月ゐる
をのかハとを出くりかく丈皇をりをるぬくハ
たちまちたを枚の摺よ拾をんり

[illegible]
小の方に底に漿[illegible]ふくなまこあるに[illegible]
[illegible]ものゝ[illegible]あるこそ見ぬるあこう[illegible]
[illegible]
地獄絵の屏風に八人ある間かぐ桑とかゝひて赤白の
遠ひあまと同し紅ふに絵り軍中にかぶるいへる
沒もこれゝの形ひかんから色又大切のもふかん絵る
蘇草と桑とにてかぐ色うんとをすへてそれのみふ
も張るまゝきう
紅子ち書立りひてこりうと知れ焼敗るとそこも
よのつひの色ちりをあくれるまに思たるまに其かり

ぞーさに感してたちまち蛇と成ぬるあゝもこの色ハ
以るへに白ひ也ちり紅子路ちに粉程も夫子ハ志くかり
を喫さまへるまや
伽羅ハ沉香の白ひ[illegible]も優にそやさし[illegible]紅さると我
沉香の黒なハ其ハ[illegible]るゞ色さる紅色以る
唐古に椒蔡をたくとひる桑にかゝきめ足するとやいえん
蔡まれをすへて色をとをさして人くしてたやすめり紅る
を戒律の門研に[illegible]
[illegible]
かでやさしいすのハ孔雀にまなゝねこうまに白ひ
ありしいへるをおちるさと人に何るゝ古信ふも

ふるさとのひしゝをゝ下ゝいづり

同人をて字宵こゝゝ蓋しゝるよりのぬ清り
のゝそ多かるかくて祝へてもまりあたるうれしさを
神よつゝゝくおとゝ侍るよ志ちのそゝへもかゝんよ
おえんして貴ゝもれくそひゝゝり爲のかうこゝくに
うちおとろかされていへゝきゝをゝくゝ立ゝあれいをゝの
れもゝとりや立ゝるゝゝ海よんゝおして咏りつゝきぬ
ゝゝを丈ゝをゝたゝりよくゝしゝる今宵ハゝて萩
よも似す神とかゝてゝきゝりしまおゝつゝ名ゝまての
梅りまゝゝ又あゝゝめて洞もおちぬへし
人へのゝくもゝゝくも思ゝるハゝんゝぬだこゝよゝてあれ

ゝゝゝハゝをおゝへぬと必かゝゝゝのゝれて宴あ侍る
かりそ夜のゝゝもんゝゝゝめくゝ例ゝ歌して面すると
ゝよゝあんん牛の志りゝゝの名れ折かゝ色ゝる
ゝのしゝゝゝへる夜ハ貴れけゝ色ゝ雪ゝ月ゝ
ゝれゝるいあゝゝ色ゝむゝ女乃身よかゝりて
此ゝありゝゝけハ仁の匂ひゝもゝへゝゝ
人のんれ閉漏ゝそおゝゝれ花ゝの山れ雪ゝりか
百篇乃詩ハゝ一年の酒ハ飲ゝゝしぬるうたゝも
歌ゝをんくのむ也ゝしゝるとかゝへのんれ人ゝ
志ゝ秋の末れ貴乃つゝりゝる匂ひゝそすれゝゝひゝ
げゝ月おの志秋欲楽のゝゝまるゝりゝ笑ひぬ

〔雪〕梅の花の白雪の玉ゝて一枝あり其時八度上人の
さゝまゝるゞ放屁の爭ひまてそ出る兄兵其音
の強弱とまけて其香の強ハ白ゝさるへ
〔薬〕店の匂ひいつくとても皆ゝ名々其中まおれ
ゝ〻ゝんハをろくの中まもかゝんとうゝ中まく
そ思ちゝされゝ別てきゝ志ゝ之るれゝや
〔女〕のをける笑話の笛ハ鼠の麻花ゝ蠅の
臭とぬゝてなつまるもてゝ有せるかの屁
蘭の油揚ゝいゝ匂ひりや初ゝす彼義ゝも
ゝゝ外ハいまゝめぬひゝそゝ
〔海〕蘭の匂ひハ蜜の友花ゝ化するゝいハある

〔の〕の細ゝゝいゝるゝの匂ひハ沙門を清新の思ひ
ゝゝいひゝ弟ハおゝ
〔松〕茸ハ柚の志ゝ志ゝる鼠のゝ毒ゝゝ
人ゝいゝわをゝん
〔蝦〕面をいゝくゝる山のかゝゝゝゝさゝゝぬ
あゝをくゝゝのハ垣ゝもむすゝゝれハ出んゝゝゝゝ
ゝゝゝれ弱るゝ蕨ゝをんゝゝくまゝゝゝ菊乃
ゝゝハゝゝ毒ゝく竹のゝゝゝゝゝゝなゝ
飛石ゝ門ゝゝゝゝゝゝゝゝ世の塵ゝゝゝゝ臭也
あゝゝの宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ方乃
ゝゝゝ書ゝゝて若のゝゝゝを折ハ変ゝるハ

おゞ〳〵すゆゑ〳〵ほ〳〵入えしぬ色〳〵
〔ゆ〕りや太平の世よはまて文芸八〻くゝまゝけ武八
戸〻の梶よおさまれる亥まうゝ代りきを
こ伏式風の日と結て丈武の梶を筆ハ持猶者
鼻とつきゝる芸やめて〳〵白ひとゝいへ〳〵と
貴ゝ〳〵せ

かゝ丁世の色 神代庚申の秋より〳〵大のをゝま
ゝりうゝ仕くまりて思ひ出るすゝと出有るへ
ゝ世ハ〻の月さる者さるいゝ侍るのかゝ喚さるの
一足をゝ添るよ帰ゝんり〳〵

江遠水味義之芳聯序并假名序　桃溪

物の世よ唱るもしいへる彩ひまを花落れ百鳴りしまを
いゝづゝらのおゝろ〳〵沢茶屋の紅を吟する木枯の海よ
まて初春の百よ造化万象の唱り拍ゝ〳〵人の
世よ唱るも昔より今ゝ〳〵ゝとづ國式公世〳〵結せすれよ唱り
徒ふ唱り霧よ唱り遠よ唱り余すも行ゝを唱る中ふ
其唱るりのを涙〳〵て唱〳〵さめ人をゝ〳〵岩乃
松よかゝへる松の志〳〵へも〳〵ゝ〳〵蓋〳〵て唱〳〵ぬ
日も竹の色〳〵ゝ〳〵ゝ伏情の又面ゝ〳〵て唱るゝまゝ
孫をあるそ〳〵〳〵て〳〵ゝ伏唱る拍を涙〳〵て唱〳〵ぬ

義をうり六味義しらすして六ちいうかる六ものや
むそうよりて六義六時の六ことあ〜れ六五六一の六い
ることなりまた又六塵六喩九波を味るものいさり
して大乗義の六つ五百塵を作〜じ
ちうあるよ白帝の名を編ることを又へすて又吐こ詠う
此日八月を六白法とし出る侍の中次すもあ〜で
凡の法よりなりき器の作ると具者姫めをして味ゐる
まやされ八大乗義の四りもまて肥ゆう家の繁花
ゆをなりん〜いてやありて桃花のめくまをこ小風光
なることをうんるといまは壮年の法より羽白の義をそん
をあるし〜こつ〜もゆるて義といへるより思へは

禁忌のおこりやまてかくるんもちこ〜ひすて儒道九
性きよ五て丈性山あるとを〜清風清月よ来き
市中ふ清流して貧賤楽〜むそを用よ八知流の
戈を包こて外よ八丈五を八ちり保性せるをうれ
丈風しりてこを〜を動りすよ閑句〜をする
おのを〜を忘れくこ義おのつ〜よ書紀をなやぐる
かくてであるずむりくまぎ〜くるもくの作笑よ
味ごひをなくすれ笑かりしかるも國字文章ろ
傑作する筆為て笑をを〜ひを〜義けハ物を識る
世ぞ義やこ〜五十歳ようて五八五十六なり拙や
韓愈ろ作文八義なるへ〜ケうむ〜出ハ意ぬハ

いはを文せよせとの詞世に出て蕭何は紅桃花紅乃
ものか。先生は唱へし人もおほくは十返離のおい古人
掃かりとやせむづ。人ゝ養へて江刀の一割を求る中に
有る詞あるを東坡の句と思ひすぐせしも天下に
学人ってこその比より志ミりに子毅一決の皓くるる
を探きどえ。まさ下巫のうつくさる生ぬの巧に
似せて伝かりち斧を斜にせむとするもあらず二毛
ある人に桃を植へしといへるもふるくみのしくさの乃
非を志りて其の綱を結ぶて綱の一疋をもとるやと
書友交稿と共に案じむされや詞乃此書世ん
いそぶと攷せんといひつらしを天下の事ざきをも

志げくて一村の内亦く日々に日を見はさを累いて築く
日の帰るより此ものかよ祿地ありは方に
婚姻のことさおこしけるより文金山の金鍋の寺
さへおつとひてかきつらんかることもれく此世ん陰の矢つぎ
ぞやいりなる精盆を及ぼまして第中に合
はさ東武乃君きに頼りて此節用末よりさ村の
食り付て来るとのさ達をもつけは友舎此
賤ぬも宿かりんにもやりて衣めちめを始めて
僮僕稚子の門に出て迎へんもよ縁こそへくましく
飛る牛も及ぶれといへ共八音の汐路の旅にも
何とす節より故の乃れ安かりける芭蕉翁李陵り

若芳をいろに厂と笑ての仮よつけて異し
こをしるすして相よ時毎乃裏を後せんを
下面のこくろんやけるを義よ釈奠さんも
や相家北日都よ成ぬるを拾むしいへるかか
思ひあへす義をこの世のうよ学れむ乃
厂の考てたるへきしてたやさ行よ立常めよ
るるをと支作りてるる枝笠乃藤男こさハ暫く
おこさてまり義の相るを祝せそやもあしん
侍ハ義へこを下響こをひ〳〵ハ柳塩多株め
あ考ろんよハ後去茅もいさをしんとこを
よ茅と深めとみよ茅をとめて訛へ

都のまをすてゆくとや
いうあるふ茅の鶏ありりむ。
こを武茅地茅もやるは
りりねの乃乃を弱ぬり。
茅ハ孔流の藤よ面りせど
情を茅をふるをふうを毛ぬ。
ろもこをよのるむるをを
里を仁ある侍代もりぬる。

文　こを茅義赴川越辞　并假名話　文楊

六味仁の人をを仁の人をを文場よ茅を模るへ面

風月の詩を作らんとせしに此の客に在る云然の
宋帝よりたまはれる兜率と称して酒とこひ傾よ七人の客を
をもてなすとて杯をひしひしさハけを詩をそなへる城
の中をうるをしく古井の蛙のうてへを祝ひくやぢやこぞれ
冬よりする春堂式のめしよ彼樽上よまとぬ
してゐるのつるに水八月の新酒と探りそへ餅とつくねも
菜酒の新と祝り此玄の設けるまつ酒をしの
拾ひよりこつの獄よおりこまて文よ紙に書よ
つくねていはをを美の友也ひとしまハ云文式
来ようぬすま山の客に意敵よ揚りて去ちをを
義よ云れんの花をつのそてしくあるを楊の義

果ぬるんとからうじて酒ひしを持を杯を
四日をうの花のおくるまををさ夕へ必上飛
若年の花よ枝曳て一夕の文延を設んしその言
いまを孫をさるよ入ぶの郭こをの世ようたもむの
下の使して到をるよ義を拓くさハ山かりはる人をを
花をちりるぬうちにくつひせるをんこをも
をどををして旅の別段の杖よ笠ををををを
みをよ郭云の一夢もまりをををハ酒りこんをの
ゆるうをををれの色を郭云の咲はをを家を
つのをををいせのをるはをを起けハすををを文宴
も思へををうをくくをを見ん山れをををれを色を

何うハいそんと旅さ第よかつけて出と情を作るのを

義くこのおさ例　文よちこに考めさ

こをの世よ人の紅て　又龍も見えあり。

人ハ論るあ者ハ　龍ようと松の孫あり。

やようれて元の未笠　おまてあせうと出紀。

六　送桃溪子序

六味

ある人ハ竹と共ある人ハ菊と共中の云ハて

亦ある人ハ鳥の音情まして別るる人の人ハ文をく

かくの歌者来よんを書くこれおそう

うんうむ〜て人の名歌者来よおとり作ハんやこを

たおの〜んの人〜婦あるとり作ハんるる歌者来を

友のをとやされハうるるこ〜ろ国の文章をたし

ことれをとりて人よなかへこれうを出しみつ〜〜〜の

しむとより石杖の業もあ〜ま〜ま〜ハ作ハ

ますのうぬ身とはとりて志ハうよ四時の変化を感

なるを山のよちのあるハ風月ハ托して一日の澤を

むの〜うせるる世ハ事風の一情変也ハうさる紙

有李業よ風と作する世帰をて和〜ふてひ為

しでうり其人とううひ作るよ大よ流作ハをへよ

呉ま〜く武よ変ハ文よ芳しくつとあて此余りハ

こゝろの文字をよみけるに花晨月夕をとゝへ人間の
是非より生ずる義まことに不朽の文章なり
うゝしくハ閑地百事忘て一とせ三年紀年を
ゝるようかゝて遠方の紀を拾ひ又一とせ八年
蕉陰のもとゝ志して義のうゝ指とゝ会知友を
ゝる思ひのこゝろやゝ彼も一時ある時ハ文筆を磨ひ
これも一時ある時ハ厂のむ書をもなくさゝめ
して世を虚する事なきハ是やこゝ尽期いとゝ
なるを法立ぬゝるさ法ゝ者世のせゝるゝ事をそ
そ遠ゝておゝまゝゝ物ハ私の情ゝれハ動ゝ
業をすこゝやゝるゝ年を終るとゝ又こゝゝ世の

里ゝ志ゝびありてゝ色彩ゝ事の印ゝ受けてゝ此ゝ世ゝ
とゝ時ゝるゝゝ丈人ハゝ志をゝ遠ゝ者ゝゝ師をゝ法ゝ
ゝるゝ文ゝ色ハゝゝゝ深ゝゝを文ゝゝ句讀
ゝゝふゝゝぬゝゝひゝゝんゝ丈友ゝ交ゝ橋ゝ戈ゝ
ゝ文ゝ又ゝゝゝゝゝ虎渓ゝ笑ひも恥ゝ
人ゝ世ゝ笑ゝ笑ゝ人ゝゝ笑ゝ非ゝ文ゝゝ
ゝゝゝ初ゝゝ一面ゝ前ゝ皮相ゝ
笑ゝ君ゝゝゝ皮ゝゝゝ相せんゝ
殺ゝ笑ゝ丈ゝ指ハゝゝ柳ゝ系ゝ丈流ゝ
蓑ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ笑ゝゝゝゝゝゝ

七　与文橋子文　　六味

あめつちの中に人ありて其心を位するを述るに文といふもの生れてより後これを翁るや三代より明になりて其人々に知しらしむ其おくれたりといへとも文物中華に恥す此字の文をもて此道を学ふるもの目にも唐にも深くして当世稜に君子出て用ゆるところ遍く天下に及ふに至れり然るを範とし　かゆがりを擒くいにしへさかれは其あるもの是は其者に知るまて其の義を合すへきかなと説これ知説君子の遺憾也されは此字の文章をもて和に

婦女子の翫ひとなりしより虚実に及ひ月生といふへし上代は皆く和歌を詠む人出て俳諧の狂句をとりて救此文に志を之しより門人許六去来其角か徒よく耳目を調ふ振るにそむきても此下の帰を覚てはく凄涼江といふ三都の名にしつ人此其人をます寒くとりてこゝに二十年さるを天此文をまて凡人居に交文橋の流士まて桃溪子氏莫逆の友として此俳筆をとり山家を深す是は例より其志白水石に隠りといひをとり明月を友と是は同しくさらに孤輪に托せりと若ふまことに栄辱の境に遁遁して人の百世に若しまさる隠

君子といふべしこれ又人間世に文を論ずるの書なり因て
おもふに同類相感じて後よりこれを見るものすべて
いまだ邸中にこれを世の中に公間
篇をとりまとめて法華経と交桃の夫士文を
もて序をなしといふ外にしかや交桃の文章は高中り
併せもしといふ橘郎宣の書弁の賦のんや子載の
子宣をもて初めてこれを論ずべし八の条頗る
しる一文人を始しせんやしかるされそれ以も同じ
類よ超へるの色ハそれ多くもまたかるもまんやや
ものいふ人よ知らぬすべと後世よ名前
といふもの名を笑ふハ鳥獣の智よりなほ
あるまつて名前を笑ふハ和人の志る所なしして其
是非ハ是ともも他せしてこれ畏こるのタこもハ
君このめるすべとつぶやきて他の編ハ求へ以此編や
祖師東東も而立文字を排子の下よ者故すべ
しといふ交郎頷して笑ふ人ハ笑と学ぶんと
ものハ和漢の材木とにもひ虚実とものよりて
はなる下よ集り彩を拾ひ名を後へんん此文を
りて古味ゝ面白のものハ時ようの海の名の機嫌よ
まりて抑揚亭よりさるのを

八　赤白二出ノ編　交桃

れ悔むすのこゝをハ必ずする拙あるを對して客
爲一歐ゝ蠅嵐ゝ即ち數も久まを生すゆゑ
かくを悔めるのゝんゝ爲を法師ゝり丈夫を疲
おのこゝ信りて信を支えるとも足へゝ生てあけゝを
さて向ひるをいう爲るすくせのんなる日も先蓮社
を拙ひて信の虚妄をしてをうをうをもるをおをひりけす
かるをうをうより登ゝいふるの龍出ゝり名れハ法師やゞて
指を嚙して押へんとすおをきゝすを法ハ急正をと
しゝを去りへをありてつねを生の法を法れぬ法師喝法
とゝて嘆して曰く世の中れるれかくのゝおのれを
繪を法ゝる信へるて人をおゝゝをせぬハ悔むをも形

余り信を生ゝの出すゝ丈分の自立あるをかこゝり爲
信を歎くるれかゞゝり爲るをやたゝ人界を法を法
すゝをまぬゝ爲くるあゝしゝのをゝを見へは風乃
普純すて沸湯をゝて血倉するハのゝを生ゝへしゝ
男ゝれを若て丈ゝ化の冒陽の者ゝく法の中れを
法ゝゝ人登ハ者ゝ章の火法をゝをへて龍ゝれ迷爲る
ゝゝゝり沸の去ゝ法を生ゝをんを也さゝも名ゝる化山さへも
拙を背頁ゝて越るゝハかを生ゝ沸精をゝをせる爲へ
風の奸ゝゝく貪るゝ同一日の拙法ゝんや法師動が
ゝゝて客ゝゝいゝ示ゝを彼すゝれる而をあげてハ
おゝを生る而をゝを法ゝ初ゝすや沸法示現釈世言

とゝ法師だにぞ居て在西方の白毫をそなへて一歌よ
三十三身をかちぬる抑宝中の蓮塔也りたれゝ
丈無垢よりまん丈志ゐまりまつりまつりまつりまつりと書ふ
するハ玉水宝林の袋よりのひたゝのゝ月明徐歩く
たゝゝとしいつを扇よ清〳〵さるゝ林よりて行そ春の
栄をうたふれかのん千れハ只天者を給くゝもよをひ
ゐのゝゝるゝとあるれのゝいりるや貪るゝいつ〳〵れ也と
男膝立立ゝ又いちんとゝ花右とのさめて秋
是恨いまゝ抱むへうゝす是ゝ悲ゝいつ色なゝんん
法師ハりとゝゝ濁りよゝまゝぬ白さまを求せよ
男ゝすきの赤ゝ宝よちゝてかゝれハおのゝんん

かゝゝ成へしゝ手ハ義の徐文よまりせて馬の尿を紫
しゝ方ゝゝ昇非のゝとゝゝかんゝいふゝゝ板を
鼓して笑ひぬ

九　晩春　　桃溪

世よんゝよにくを伝ゝひおそゝ紅のを晩といへる
されハ伝ゝ三十二れとゝゝれゝまして蓮也万行
ゐるいゝを文ゝつゝゝ晩ゝいへるもの不業と月るよ
丈ゝゝるゝやゐまゝゝ紅花をお者よゝ徐ゝ云を
のゝゝれとゝがゝゝろゝゝいへるゝ月世義ゝ素
肯れて尼話月慣の学ゝん産もし徐ハゝ紅せ

さるを、おりしも人の宿にて裸まろく嗔とつとむるハ
角力とよぶのミならず此そのハ四季ともに丸裸
にて居らしとさへる風情もなきハおのづから火の車に
引かるべきらしなるらんされども虎の皮をもて褌に
定めたるかミなりの清潔しとも見えしはさされたる形の
あさくことまりかれハんゆるすへき差起も能し
宗吉がかける鬼の首も志つれ渡康大江の山ぐに
住て一さひハ鉄火をかゝし拾子蹟に身を変すれ
ども經まさく条子の矢先に勝すなへれあるハ
渡邊に腕をとられし迷伯母に成て取戻し事済
まし給へるらしとなりし難光の王のねに張本

酒顛を納めしをごろしくなる迄より一家の鬼
と成て宅の散れ間をうかゝへ去別が日記にいひし
かよひのさし袖に目くるめけるハ赤いろしにゆへ
拵ハますて覃場の送茂木叢よりもおそろしく
鉄炮玉にハあらて鬼ハ外と打出す豆に福の神を
姉ミかゝり福の海へ追行らんこゝろ迄皆おのがんとれ
むかより心の鬼のなくるかれハ目葉月清ハさ清
すなかりしはすがの文人なりし韓愈をこゝろせし
むかひ成へしまどか浮名の竹にさへ百合や薊(アザミ)の
名に立て詠に似ぬ子の肩衣に鬼縁子見ゆる
いかに扇のいかりもおそろしからんとかのうかぬ松の

ゆふ立ひとせて玉敷赤敷といふ和と影して
さるがうの冠とせりと世ゆ弟きよ出そめ
ゆ一つ玉鬘山の影ころ〳〵ふるのくさ草て流使
の一枝よあへるとうるとそれうるとそ文くゆう
矣敷の中よう兵香う句対と吟して彩柳素若の
ゑ添も川の元まのう対敷の一枝をもらまと亜うん
さ八志ゆ〳〵れ流ゆて緑よ様乃ゆともいたむ
志う〳〵八それ〳〵の学鬼と先まとして亜句八文人
て物俳諧のゆあ一をあ亜八鬼の句句も異亜へ一
志う活ゆ雅れ徒よ和〳〵て文亜よ志ゆ〳〵八角と
ゆとゆむつ〳〵れ造化徧もいひまけすゆ〳〵う

角よ牙あ〳〵を志乃の姉れ八そ亜て〳〵八とふ
たゆ亜むへさう人の角れかく句ゆそ鬼中ゆ信鬼
しおとゆて出くく文化よ抜て角〳〵と徐発く
義ゆ味

十　求二不孤一辞　六味

世よ下里巴人の曲といふありゆのる曲ようゆん
志ゆ不侍頭玉白亜の曲よ抜てよ彩花筆とかと
竹尾亜墨をすりて如す字玉るゆのるて比曲を
文う八ゆちゆ和せんゆと亜まんされ八出安よ
志の玉ゆ〳〵れて度歳の月徐ゆる比ゆ志人

対して文字の仮とするの理論は遠く老子
おのづから出ぬ光法と悟まし桃李の実をよ酒ハ
とをつきこそその條せあんよ八てよ分法と悟ま
さうんやなる人ありう文字の仮とハのとうて文字を
のむやあるさせるとうてこれとのひと若ハ物ハ
よるさせるとさてるんと一箇ばさづくれて見るふ
秋よあるさ物論ハ論の光りいとさまげ
の色ハうち弱るさて仏ハ法を知るんよ
丈夫をとためて見るも宗人のにくめる人歌の
私のんりむて為ハ行ハ師ハ強食の沈をよのさて
絵猫ともひかるつおの書ようちられるを

今も行ひ人の法よ称ハ絵ハ捨て己を利するんと
貴て己を利するいと捨ハ丈日の捨れかんん
よるいるよ為人の古法とりて法を志んやさるを
させるるて成の紀ハ成実のうけるるハ
宗実よこれと求めんとすりとり物器ハ法ふ
くこにて見成ハ成るの工よれハ成ること入る
句論ふるく拙すさハこれよ仏するのさせるれもさ
ふハすとは持を紀て拙るる支とせるむのを

十一　阮巾ノ為　桃溪

阮巾くおのるの阮巾や角よくて里よ志ろて

世をさうぶくの相すさまじひてんくの気あるをや
なる人ハ酒を濫して嘶林の具よ待揚を探り何る
義を某誠に是をうるよ詩の名ハ何をむして
俳諧のこまやかなるをハ第一むこれ〳〵ハ風流の肌骨
なるんあるハ本覓の淺黄も猿の蓑もこのごとく
かしこる探れおろこと是をて所中ハ猛なるかゝ和
蕪屋孫好鶯の尾ハ猛所中の古歳なれはよ
へくをあるを大ス所中ハ鬼よ立つき星あり筋ハ
方白あれハ烏帽子をつを大雲山ハ月ありまて
八幡社よ雲を立ねば眉底よ程くは誠ぬく
吹を小寺化を好むハ風木ハ対すれすぐなん

淵をを之枝雲枝のもれよりて頃馬上の肩を埋り
各治まの姿なるへ〳〵かくそを小豊ハ特〳〵ハ
名の丈かゝのにくさげなるを花ハ誠よおそろ
しや表題是新の名ハ流色てる所寝面乃
遊子ハ人めの実ハつまゝくやそ色しまを年の花
なを是ハ拾まゝ花をあんう物をを所色是熟の
理を編〳〵丈ハの所よ為て何をまの意ハ生んを
所中氣象をて俳の義なる中地ある俳諧の俳句よ
物人の所中をを是ハおどけをのゝいへるてそふく
虚実ハ塚をゝ是をるあんゝ所中するハ友ども
よを俳句てを

十二　不成就日ノ解　支考

世に不成就日といふ悪日ありて正月ハ三日二日一
とかんなに書つけて何事をもなさず口惜からぬ
いてや孔子のうまれ給ひける日も釈迦の誕生なりとも
此沙汰なく又中古の才たちへ志してたるものゝいひ
出しにて世の人ひとへに是をまことゝしてすこし家毎に
身ゆせはなくとりといふ冥の毒ありと思ひこみの
いもなく薬なりとしることも尊ひ此の人の不便
なりけん其河豚に当る事の是を喰ひ此山のいもれ
さらにまちかまもしと化しけんなぞとすまいと

にくまんやたる此まよしとせんやとかくにに経
するまでひかりいはでうる板して軍配の日を渕を
見用不用の境を知りの方すにあてゝ用ひて知らの
ぶるとゆるしてほかなすとの数術と云すへし
志りて八のぞりてよ此は経にハ成就せさる日なり
とて用ひす雨にくひとさ歎き成りハなりさるも
なほ日と訓点をつへて用ひハ三百六十の日相ならる
吉日なりへし治りや暦の下段も十死日大禍日を
日の二なれとも此らんにハ凡をりに殺さもせるへく
無かりに此を作らんにまいて黒日にも黒も是ね八福日
日にも捨たす是にに用の日を知て只吉けを

りてくるよハあるてこそ思ふ家屋敷のかよひ路さよ衣
家の吉日とぞ聞く月日月の五のつゐをすへてと
門おれ柱まも東方の五すも考へせす我兄妹計
よかくハ志ゆ〜行るさりとてこの敷せる日ゆりとて
面ゆとあせてよハゆ〜さるゆ〜世さりこまをへて
かくいへハつ多く苔の赤岳の浪すも帆ゆ飛ぶ成終
百年能の洲よおねく志高姫をいすさいそさる所
ゆて家的ハ家をまされりとやいたん

孝撰文選巻之二終